
『腹の虫。』

synchronicity529

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『腹の虫。』

【Nコード】

N8239K

【作者名】

synchronicity529

【あらすじ】

人間は『建築家』と『建築家以外』に大別されると考えます。これは周辺環境の解釈と再構築を補助する道具として作りました。

(前書き)

『目覚めたら非日常が並べられていた。』

「魚の切り身はサプリメントに取って代わられる」という優越感と不安が連続するシークエンス、それは駄菓子のような無類のグルメという取り立てる価値がないと思われる社会共通の嗜好品かもしれません。

魚の切り身。木になっていない果物。鶏のささみ。私の日常の中には非日常が並べられている。

それは白いポリエチレンパックの中で動くことも語りかけてくることもない。ただラップでふたをされたバーコードつきの商品が陳列されている。さもその形で生まれてきたように、こじんまりと。ここからは生温かさも濃いにおいも柔らかさも感じられない。ただ生臭い、同じ赤身のかたまりが冷蔵ケースのなかで納まりをよく陳列されている。

それを補充しているパートタイムの顔には笑みもなく疲れもない。ただ仕事の流れる早さはかわらない。

工場見学のとくにみた微動だにしない美しい流れを思い出していた。幼いながらに工場の機械は生きていると感じたことを思い出した。あの機械は新鮮な命を食べていた。感情のおさまらない暴れ狂う生き物を。その生きた唯一無二が絶え間なく赤身に加工されていく。まるで輪廻転成のようにベルトコンベアーの上に乗せられている。無いように確かにあるその工程が我々の食べる習慣に飲み込まれていく。

私たちの生活は、生き物を殺してむさぼるのが残酷なのか、生き物と認識できなくさせた利便性が残酷なのかが分からない。私の虫は右心房と左心房の間から、私の鼓動を激しく煽りたてた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8239k/>

『腹の虫。』

2011年1月8日23時18分発行